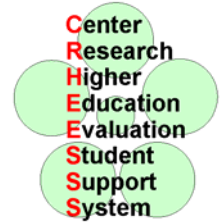


週刊センターニュース No.185



第185号(2007年12月3日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○共同学習会のご案内 ○●○

・第166回共同学習会

日時: 2007年12月4日(火) 14時45分~16時15分

※通常と曜日・時間が異なりますのでご注意ください。

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟1階小会議室(管理係前)

テーマ: 来年度からの初年次環境教育、安全衛生教育について

報告者: 西山宣昭(大学教育開発・支援センター)、森 茂(環境保全センター長)

趣旨: 大学・社会生活論において、環境教育が取り上げられ過去2年授業が行われてきたが、その効果を検証し、来年度の授業内容について議論する。また、より広く安全衛生に関する内容も環境教育に含みこむ可能性についても議論したい。大学・社会生活論の環境教育の内容の再検討について、多くの教員の参加、ご意見をお願いしたい。

・第167回共同学習会

日時: 2007年12月6日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

テーマ: 学習支援体制について—FD研究・実践開発シリーズ第4回—

報告者 堀井祐介(ICT教育推進室、大学教育開発・支援センター)、川添真澄(情報部中央図書館)、橋本美智子(学生部共通教育室「なんでも相談室」)、青野透(大学教育開発・支援センター)

趣旨: 学生の予習・復習を前提として授業を行う以上、「授業内容・授業方法の改善」(FD)のためには、学習支援体制の充実が不可欠である。本学のその現状について、アカンサスポータル、図書館、および学び方相談(「なんでも相談室」)を具体例に検証し、議論する。

○●○大学における専門英語教育について ○●○

11月11日、当センター主催で表記のテーマについて第4回専門分野別教育開発セミナーが開催された。今回は、理系専門英語に焦点を絞り、日本言語政策会長の田中慎也氏、武蔵川女子大学薬学部教授の野口ジュディー氏により専門英語教育の必要性、教育方法の現状について講演が行われ、続くシンポジウムでは「一般英語教育と専門英語教育を繋ぐには」に焦点を絞り、約80名の参加者を交えて議論を行った。

シンポジウムの冒頭で、外国語教育研究センターの渡邊明敏先生と、薬学部の奥村順子先生にそれぞれ工学部人間・機械工学科、薬学部での専門英語の授業内容について詳細に紹介していただいた。それぞれの分野に対応した教材の選定、教育方法について様々な工夫、改善の繰り返しが行われていることがよくわかった。シンポジウムのテーマである「一般英語教育と専門英語教育とを繋ぐには」について様々な意見が出されたが、教材の問題ばかりでなく、学習時間の確保、担当教員など様々な問題が存在する。本学では、来年度の3学域下での新カリキュラムの中に英語特修プログラムが配置される。1年次から4年次までどの学年からでも受講可能にするために全学統一時間帯を確保して実施されるものである。外国語教育研究センターが主体となり現在主に共通教育科目として開講されて

いる英語Ⅱ、英語Ⅲから科目編成されるが、内容は一般英語であり、中、上級者向けのリーディング、ライティング、コミュニケーション、プレゼンテーションの内容となっている。今後も、専門英語とは何か、一般英語とは語彙の違いを除けば何が異なるのか、この英語特修プログラムの教育開発を通して一般英語担当教員と各専門の教員とのコミュニケーションが必要と思われる。

なお、今回の講演者の野口先生から専門英語教材として活用できるウェブサイトをお知らせいただいたので、以下に紹介する。院生など学生に紹介していただきたい。

Nature <http://www.nature.com/nature/podcast/archivetranscripts.html>

Science <http://www.sciencemag.org/about/podcast.dtl>

Kyoto Life Science Dictionary <http://lsd.pharm.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>

(文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭)

○●○ 一橋大学社会学研究科におけるティーチング・フェロー研修について ○●○

11月29日、東京農工大学において東京外国語大学、東京学芸大学、電気通信大学、一橋大学、東京農工大学からなる多摩5大学シンポジウム「日米におけるTA制度と研修」に参加した。そこで報告された一橋大学における表記の取組について紹介したい。

No.180 センターニュース(10月29日号)で、中教審大学分科会の小委員会の審議報告書について紹介したように、教職員のFDに関連して大学院におけるプレFDの重要性が指摘されている。大学院で教育を経験させることは、大学教員の養成という意味を持つ一方で、例えば情報系の大学院生がプログラム相談員などを大学で経験している場合は、その経験は企業等においても大いに役立つことが企業側から指摘されている。

平成17年1月の中教審答申では大学院教育について教育プログラムやコースワークに基づく組織的な教育の必要性を述べているが、大学全入時代において学士課程が教養、専門基礎教育にシフトせざるを得ない状況においては、当然の時代の要望といえるかもしれない。ここで、大学院における組織的なプレFDは、専門教育の要素をも包括しうると考えられる。ともすれば自分の研究テーマに関連するごく狭い領域にのみ精通しがちであるが、以下の一橋大学の事例からわかるように、授業を経験させることによって、自分の専門領域および関連領域の知識を系統的に整理し、十分に理解するまたとない機会となりうるであろう。

一橋大学大学院社会学研究科の取組は、おそらくアメリカのTA制度をモデルにしていると思われるが、教育経験も積ませるといふ本来の我が国のTA制度発足の趣旨に沿ったものである。「社会科学の先端的研究者養成プログラム」として文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に採択されプログラムが開発されたが、今年度で終了する。しかし、今年度から新たに大学院教育改革支援プログラムに「キャリアデザインの場合としての大学院」として採択され、取組の経済的支援が維持されている。これらのプログラムの開発は、社会学研究科と同大学の大学教育研究開発センターが共同で行ったものである。

このプログラムでは、社会学研究科博士課程後期の学生を対象とし、研修修了者にTF(ティーチングフェロー)ディプロマを授与する。研修は大きく2つに分かれる。一つは、授業実習である。指導案作成、担当教員による事前指導を経て授業実習を行う。その間、実習日誌など実習の過程をティーチング・ポートフォリオとして記録する。二つ目は、講習会の受講である。「授業設計とシラバス」、「成績評価と授業評価」などの基礎講義の受講、同プログラム修了生の体験談と討論、高等教育の専門家による「大学教員のキャリアサイクルについて」の講義受講、受講生が作成した模擬シラバスを小グループで議論する討論会、教員の授業のビデオ視聴と討論、などのメニューからなる講習を受講する。

大学院のカリキュラム改革、プレFDなどは本学においても今後重要な検討課題になると考えられる。当センターでは、これらに関わる情報収集、事例研究に着手している。今後、共同学習会等で紹介する予定である。

(文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭)